

日本産タマムシ科概説 (19)

黒 沢 良 彦

私が本稿を書き始めたのが本誌第1号の発行と同時にであるから、丁度今から8年前の2月である。今読み直してみると、最初は属の解説の方に重点を置いていたせい、種の解説は著しく簡単で、数行のものが多いが、回を重ねるに従って、種の解説の方に傾き、だんだん詳しくなっている。従って不本意な点が多い。また、その間に私の外遊によって模式標本を直接調査する機会を得たこともあって、以前述べたことを変更しなければならなくなった所も多い。そこで、今回は総括の意味で、以下にこれらの点について述べる。

第4号掲載分

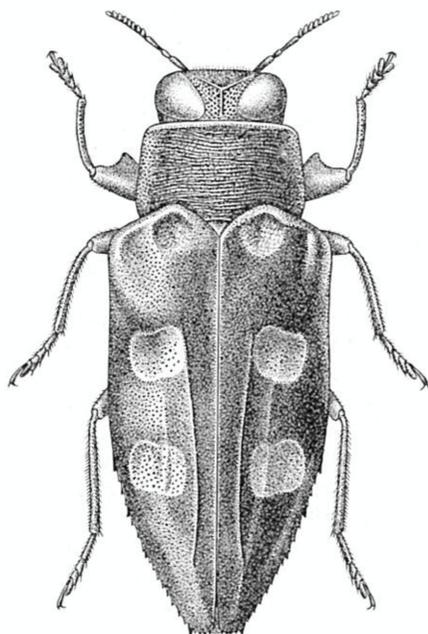
I. Julodinae フトタマムシ亜科

Sternocerinae としたがこれは私の勘違いで、地中海地方から中近東、南アフリカに分布する属 *Julodis* ESCHSCHOLTZ を基にした Julodinae の方が正しい。

1-1. *Chrysochroa fulgidissima* (SCHÖNHERR, 1817)

タマムシ(ヤマトタマムシ、ヤマトルリタマムシ)分布: 日本(本州、四国、九州、対馬、屋久島、種子島)、朝鮮、台湾、ラオス。最近ラオスから記録された。恐らく中国にも産するであろう。日本における分布北限は、裏日本では山形県庄内地方、表日本では福島市であるが、恐らく宮城県にも分布するであろう。エノキ、ケヤキ、サクラ類、カン類、カキなどの衰弱木や枯木につくが、モミの枯木に幼虫が発見された記録もあり、適当な枯木でさえあればかなり広汎な樹種につきも

のと思われる。台湾産のものには全体鉄錆色を帯びるものが稀ではないが、日本産のものの中では極めて稀で、私は長野県伊那産という1頭を検したことがあるだけである。



第32図 オガサワラムツボシタマムシ

Chrysobothris boninensis Y. KUROSAWA

2 脈をその中を含んでいる点で異なる。沖縄と奄美における前種の代置種であることは確かで、沖縄からの前種の記録は恐らくは人為的に移入されたものであろう。加害植物はリュウキュウエノキ。

1-3. *C. holstii* WATERHOUSE, 1890 オガサワラタマムシ(オガサワラルリタマムシ) 小笠原諸島の父島と母島に稀ではない。加害植物はムニンエノキ。父島産と母島産との間に多少の相違があると云

Buprestis fulgida OLIVIER, 1790 の方が古い、これは同じ刊行物に記載された *B. fulgida* OLIVIER, 1790 (今は *Psiloptera* 属) の方が頁が先行するので使えず、SCHÖNHERR が代りに与えた *B. fulgidissima* を使わなくてはならない。THUNBERG, 1784 の *Buprestis elegans* は図や記載こそ本種ではあるが、インドの *Buprestis elegans* FABRICIUS, 1781 (現在は *Evides* 属) の誤同定であるので使えない。対馬から記載された *Chrysochroa coeruleocephala* MOTSCHULSKY, 1861 は全くのシノニムである。

1-2. *C. alternans* WATERHOUSE, 1888 オオシマルリタマムシ KERREMANS, 1908 は前種の亜種にしている。しかし、点刻が著しく強く、翅鞘の紫赤色縦条がやや内方にかたより、第

うが、確認はしていない。模式標本は金緑色光沢の強い標本で、前胸背に赤条の痕跡がある。OBENBERGERが記載した変種 *matsumurae* OBENBERGER, 1934 は父島に普通に見られる青藍色を帯びる個体で、区別する必要は全くない。

なお、鹿児島から記載された *C. mikado* OBENBERGER, 1919, ミカドルリタマムシは日本産ではなく、多分フィリピン産の *C. fulminans tenuicauda* KERREMANS, 1891, ツマアカルリタマムシと同一種ではないかと記しておいたが、1973年にブラーグの国立博物館にある OBENBERGER のコレクション中の模式標本を検した結果、私の推定が間違いでないことを確めた。ラベルには "Cagosima, Japan; Coll. Nonfried" とある。この標本は恐らくは真に鹿児島で採れた標本ではなく、当時鹿児島におられた誰かがフィリピンで採集した標本をヨーロッパに送ったものが、誤って日本産となってしまったものと考えている。

第5号掲載分

4-1. *Tamamushia virida* MIWA et CHŪJŌ, 1935 ツマベニタマムシ (ツマベニヤマトタマムシ) 小笠原諸島の父島と母島に産し、両島産の間に相違はない。有害植物はアデクでモモタマナの花にも来る。

6. Genus *Nipponobuprestis* OBENBERGER, 1942 マダラタマムシ属

日本のアオマダラタマムシとクロマダラタマムシの2種のみを含むが、この属は北米東部から南部にかけて分布し、5種を含む *Texania* CASEY, 1909 属に極めて近く、区別する必要がないかも知れない。

7-1. *Chalcophora japonica* (GORY, 1840) ウバタマムシ吐喝喇諸島宝島産を亜種 *takarajimana* Y. KUROSAWA, 1974, 琉球の久米島産を亜種 *kumejimana* Y. KUROSAWA, 1974, 八重山諸島と台湾産を亜種 *miwai* Y. KUROSAWA, 1974 として区別した。宝島以外の吐喝喇諸島産は中之島のものは日本内地と同じ亜種 *japonica* (GORY, 1840) に属するが、他の島の標本は見えていない。宮古島と喜界島産のものは一応沖縄と奄美の亜種 *oshimana* NONFRIED, 1890, アオウバタマムシに属させておいたが、多少の疑問がないわけではない。オオシマルリタマムシをタマムシとは別の独立種としながら、アオウバタマムシを亜種とするのはおかしいと云う論も起りうるが、後者は日本内地の亜種との間に大陸の2亜種 *chinensis* (SCHAUFFUSS, 1879) と *bourgoini* OBENBERGER, 1935 をおくと連続するので亜種と見做した。

7-2. *C. yunnana* FAIRMAIRE, 1888 サツマウバタマムシ吐喝喇諸島産を亜種 *nakanei* Y. KUROSAWA, 1974, 台湾産を亜種 *formosana* Y. KUROSAWA, 1974 として区別し、中国浙江省鎮江産の標本で記載された *C. nonfriedi* OBENBERGER, 1935 を中国中西部の亜種にした。原亜種 *yunnana* FAIRMAIRE, 1888 はインドシナ半島中北部から中国南部に

かけて分布する。日本内地の亜種 *satsumae* LEWIS, 1896 は屋久島、種子島以北に産し、小笠原諸島や北大東島にも移入された。一方南大東島には沖縄本島の亜種 *abnormalis* MIWA et CHŪJŌ, 1935 が移入されている。

C. zoufali OBENBERGER, 1924, ツクシウバタマムシもやはりブラーグの国立博物館で模式標本を検した結果、小アジア、シリア、コーカサスなどに分布する *C. alternans* (ABEILLE DE PERRIN, 1904) に他ならないことを確めた。模式標本は3頭あり、2♂♂は Jawata, Kiushiu 産、1♂は Lohang, Tehse 産となっている。前者は間違いなく北九州市八幡であるが、後者がどこか私には判らない。どちらにせよ、日本産でないことは明らかで、日本のファウナから除外した方がよいであろう。

第7号掲載分

8-1. *Psiloptera (Lampetis) japonensis* OBENBERGER, 1914 ミズイロツヤタマムシ ブラーグの国立博物館にある模式標本は2♀♀で単に Japan のラベルがついていた。この標本も南インドに多い *P. (L.) fastuosa* (FABRICIUS, 1775) の青色型に当るものと思われる。やはり日本のファウナから除外されるべきものである。

11-1. *Paratrachys hederæ* E. SAUNDERS, 1873 ミスジツブタマムシ 原記載には "on ivy stems" とあるだけで産地の記載がないが、大英博物館にある模式標本には Nagasaki, Japan のラベルがついている。同博物館には他に China のラベルのついた1頭がある。また、OBENBERGER, 1958 は中国の雲南省から本種を記録した。THÉRY, 1925 は北ベトナムから記載された *P. hypocrita* (FAIRMAIRE, 1888) を本種のシノニムとしたが、私は香港で白水 隆博士が採集された *hypocrita* の記載に合う標本を持っており、疑問に思っていたところ、大英博物館とパリ自然科学博物館の両方に *hypocrita* の Type と称する標本があり、前者のものは *hypocrita* の記載に一致するもので、香港のものにも一致するが、後者のものは日本の *hederæ* に一致するものであった。これで THÉRY が *hypocrita* を *hederæ* のシノニムにした理由が氷解した。従って、本種の分布は中国からベトナムにまで拡大される。

11-2. *P. princeps* Y. KUROSAWA, 1976 オオシマツブタマムシ 体長2.8~3.7mm。前種に似るが瘦型で点刻が弱く、翅鞘のそれは時に斜の列になり、毛斑は太く密であるなどの点で異なる。前回 *P. sp.* としておいたものであるが、今年やっと命名することが出来た。まだ奄美大島産だけで、徳之島の標本を検していない。沖縄本島産はやや小形で、円味が強く、点刻がさらに弱く、多少唐金色を帯びることが多いので亜種 *chujoi* Y. KUROSAWA, 1976 として区別した。

なお、八重山諸島と台湾にはオオイタビは広く分布するのに本属の種類は1種も知られていない。平

地や低山地のオオイタビ類を探せばあるいは発見されるかも知れないと期待している。

12-1. *Acmaeodera luzonica* NONFRIED, 1895
キボシフナガタタタマムシ 体長7.5~11.0mm. 黒色。翅鞘の両側中央後に黄紋がある。台湾のものは黒色であるが、フィリピンには緑色を帯びたものがあり、インドシナ半島の亜種 *coomani* BOURGOIN, 1924は紫色を帯びる。八重山諸島の波照間島だけに産し、他の島からは記録がない。

第8号掲載分

14-2. *Dicerca tibialis* LEWIS, 1892 トゲフタオタマムシ 原産地は奈良県柏木である。中国から記載された *D. latouchei* FAIRMAIRE, 1899 の模式標本は私の想像した通り、本種と思われるものであったが、多少緑色を帯びていた。これが亜種的な傾向か個体変異かは検した標本がただ1頭だけだったので確言は出来ない。

16. Genus *Ovalisia* KERREMANS, 1900 クロホシタマムシ属

大英博物館で検した模式種 *O. auricollis* (DEYROLLE, 1864) (= *insularis* KERREMANS, 1900) は間違いなく日本のクロホシタマムシと同じ属の種類であった。従って *Palmar* SCHAEFER, 1949 は本属のシノニムになる。

16-1. *O. tonkinica* KERREMANS, 1895 タイワンクロホシタマムシ 分布：日本(九州, 屋久島, 天草), 琉球(奄美大島), 中国, 台湾。 *O. davidis* (FAIRMAIRE, 1887), タイワンクロホシタマムシとして前回解説した種類であるが、ヨーロッパの博物館にある模式標本を見て廻った結果, *davidis* FAIRMAIRE は日本のマダクロホシタマムシによく似た種類で本種とは別種であることが判った。北ベトナム(トンキン)から記載された *O. tonkinica* KERREMANS の模式標本が本種によく一致するので、これを種名として用いたい。私が台湾から記載した *O. igneimbata* は本種の台湾亜種とした方がよいであろう。私が日本から記載した亜種 *intermedia* (Y. KUROSAWA, 1956) は恐らく大陸産の原亜種と異らないと思うが、詳しい比較をしていないので、将来の検討が必要であろう。中国から記載された *O. kheili* OBENBERGER, 1925 と中国の雲南省から記載された *O. pulchra* OBENBERGER, 1921 は共に *tonkinica* KERREMANS, 1895 のシノニムと思われる。

16-2 *O. vivata* (LEWIS, 1892) マダクロホシタマムシ 今まで、日本特産種と考えられていたが、私は台湾台中県梨山産の1♀(1. vi. 1971, KANMIYA 採集)を検した。日本産と大差ないようであるが、詳しく比較してみると相異があるかも知れない。中国北部から記載された *O. davidis* (FAIRMAIRE, 1887)をその記載と OBENBERGER の検索表(1951)から私は前種の種名に当てていたが、バリ国立自然科学博物館にある模式標本は意外にも外観は日本のマダクロホシタマムシにそっくりの1♂であった。ただし、腹端の形が異なるので、今の所別種とし

ておいた方がよいであろう。

16-3. *O. virgata* (MOTSCHULSKY, 1859) クロホシタマムシ 本種も台湾から発見された。ただし別亜種と思われる。中国から記載された *O. subangulosa* (FAIRMAIRE, 1889) は予想していた通り、本種と同一種で、翅端の形が多少異なる。日本産は前回記した通りこの中国産の亜種に似ている。北海道や本州中北部ではそう稀な種類ではないが、西日本では稀で、兵庫県城崎郡香住町, 広島県冠山, 鹿児島県霧島山などの標本を検しただけである。四国にも産すると思うが標本を検したことがない。

17. Genus *Scintillatrix* OBENBERGER, 1956 キンヘリタマムシ属

模式種は *Lampra rutilans* (FABRICIUS, 1777) である。誤って命名者を LINNÉ にしてしまったので訂正する。

第9号掲載分

18-1. *Philanthaxia yanoi* Y. KUROSAWA, 1963 ツヤヒメマルタマムシ 小笠原諸島の父島と母島に産する。母島産は父島産より美しいものが多く、全体美しい青藍色や紫紺色を呈する変種は母島に限って産する。加害植物はアデクであるが、ムニンエノキにもいる。またモモタマナなどの花にも来る。

18-2. *P. sp.* クロヒメマルタマムシ 分布：琉球(与那国島)。体長8mm内外、黒色、多少唐金色を帯びる。台湾の紅頭嶼(蘭嶼)から記載された *P. convexifrons* Y. KUROSAWA, 1954 コウトウヒメマルタマムシによく似ているが、体色が異なる。与那国島で数頭採集されているが、他では採集されていない。

19-1. *Buprestis* (s. str.) *haemorrhoidalis* HERBST, 1780 クロタマムシ

奄美大島亜種 *arakii* Y. KUROSAWA, 1942 と同じと思われるものが沖縄本島と沖永良部島にも産する。ただし、多少の相異が島ごとにある。恐らく徳之島にも分布するであろう。伊豆諸島では御蔵島産の1♀を検したが他の島の標本は検したことがない。小笠原諸島では父島に移入されている。

19-b-2. *B. (Cypriacis) sterbai* OBENBERGER, 1943 ステルバアカヘリタマムシ

B. aurulenta LINNÉ, 1758, アメリカアカヘリタマムシによく似てい、翅鞘の縦隆条間は一様に密に点刻される。この点でアカヘリミドリタマムシではない。また前胸側縁は一直線で中央の溝は弱い。この点で側縁が弧状に湾曲するアメリカアカヘリタマムシとも異なる。一応独立種と認めるが、これに一致する標本は見たこともない。模式標本のラベルには“Süd Japan”とあるだけである。

21-3. *Eurythyrea tenuistriata* LEWIS, 1892 アオタマムシ 現在知られる分布の北限は福島県で、それ以北の採集例を知らない。

C-b. Subtribe *Anthaxiites* ヒメヒラタタマムシ亜族

Anthaxites と誤植されているが *Anthaxiites* の

方が正しい。

23-b-4. *Anthaxia (Haplantaxia) ihanatumi* CHŪJŌ, 1970 オキナワヒメヒラタタマムシ

A. sp. としたものである。4, 5月頃花に来る。またリュウキュウマツに害する。

23-b-5. A. (H.) *moya* CHŪJŌ, 1970 ヤエヤマヒラタタマムシ

これも A. sp. としたものである。

第10号掲載分

25-1. *Chrysobothris chrysostigma* (LINNÉ, 1758) カクムネムツボンタマムシ

北海道亜種 *yezostigma* Y. KUROSAWA, 1963 が青森県に産することが報告された(阿部東, 本誌25/26号, 1975)。樺太亜種を *samurai* OBENBERGER, 1935 としたが、これは誤りで、樺太のものは北朝鮮, 満洲, シベリアのものと同じ亜種 *kerremansi* ABEILLE DE PELLIN, 1894 とした方がよいであろう。

26-2. C. *samurai* OBENBERGER, 1935 ツシマムツボンタマムシ

本誌33号で訂正した通り, *samurai* OBENBERGER, 1935は本種の4紋型を指し, *tsushimae* OBENBERGER, 1936は6紋型を指すが, 前者の方が1年早いので種名には前者を用いなくてはならない。4紋型と6紋型は遺伝的な型と考えられ, 地方によって4紋型の出現頻度が異なる。一般に大陸では4紋型はほとんど現れないが, 対馬では少なからず現れ, 広島県や岡山県ではかなり高率で現れる。最近福島県で採集されたのも4紋型であるし, 樺太のものも4紋型である。あるいは本州中北部から樺太にかけては4紋型ばかり現れるのかも知れない。九州飯田高原でも記録された(入江平吉, 本誌25/26号, 1975)ので我が国の分布は本州, 九州, 対馬となる。

25-3. C. *daisenensis* Y. KUROSAWA, 1963 ダイセンムツボンタマムシ

前種によく似ているが, 前胸背中央に浅い縦溝がある点で異なる。私が C. *amurensis* PIC, 1904 と考えていたものは, 本種の異亜種に当るので, subsp. *koreana* Y. KUROSAWA, 1975 として記載した。

25-4. C. *igai* Y. KUROSAWA, 1948 ヤマムツボンタマムシ

C. *nikkoensis* Y. KUROSAWA, 1963, C. *n. monticola* Y. KUROSAWA, 1963, C. *i. kumagaii* Y. KUROSAWA, 1963 などは多くの標本を検討してみるとすべて同一種の変化圏内に含まれて区別する必要はないと思う。従って分布は本州, 四国, 九州となる。本州での分布北限は目下の所, 福島県である。和名はイガムツボンタマムシよりはヤマムツボンタマムシの方が適当と考えられるので, 発見者伊賀正汎氏には済まないが後者にさせてもらった。

25-7. C. *succedanea* E. SAUNDERS, 1873 ムツボンタマムシ

私がダイセンムツボンタマムシの朝鮮亜種に当てていた C. *amurensis* PIC, 1904 はバリ国立自然科学博物館新蔵の模式標本を調べたら, ダイセンムツ

ボンタマムシではなく, 本種と同一種であった。従って, 当然なことながら, 本種は朝鮮とアムール地方にも分布することになる。

25-9. C. *ohnoi* Y. KUROSAWA, 1975 アマミムツボンタマムシ

C. sp. として報告した種類である。奄美大島の標本は多数検したが, 徳之島の標本は1♂を検しただけである。奄美諸島の特産種である。模式標本の採集者, 大野正男氏への献名である。

25-10. C. *saliaris* Y. KUROSAWA, 1948 オキナワムツボンタマムシ

八重山諸島産は翅鞘の縦隆条がやや強く常に4紋であるので, 亜種 *yaeyamana* Y. KUROSAWA, 1975 として区別した。

25-11. C. *boninensis* Y. KUROSAWA, 1975 オガサワラムツボンタマムシ

これも C. sp. として報告した種類である。母島産は父島産の基本亜種よりも青藍色が強く一層美しいので, 亜種 *suzukii* Y. KUROSAWA, 1975 として区別した。採集者, 鈴木邦雄氏への献名である。

なお, 北朝鮮から記載された C. *laevicollis* Y. KUROSAWA, 1948 ホソムツボンタマムシはツシマムツボンタマムシの細型の♀の個体変異にすぎない。

第11号掲載分

27-1. *Toxoscelus auriceps* (E. SAUNDERS, 1873) クリタマムシ

中国の山東省膠川から記載された *T. mandarinus* (OBENBERGER, 1917) と中国浙江省から記載された *T. similis* GEBHARDT, 1928 は共に本種のシノニムである。従って, 本種の分布は大陸にも拡大されたわけであるが, 朝鮮産の標本も検した。吐噶喇諸島中之島産の標本は内地産のものと多少異なるので, 別亜種として区別した方がよいであろう。

27-4. *T. amamianus* Y. KUROSAWA, 1963 オオシマクリタマムシ 分布: 奄美大島。前種によく似ているが, 前胸背の皺が強く, 雄交尾器の形が異なる。前回前種の亜種としたが, 別種とした方がよいであろう。

27-2. *T. yakushimensis* Y. KUROSAWA, 1957 ヤクシマクリタマムシ

屋久島, 奄美大島の他に沖縄本島にも分布し, それぞれ多少の相異があるので, 3亜種を区別してもよいであろう。これらは近く記載するつもりである。なお, クリタマムシ属の各種は腹部末節端の形, 特に♀でよく区別される。

27-3. *T. sasakii* Y. KUROSAWA, 1957 カラカネクリタマムシ

霧島山産のただ1頭の標本に基いて記載したものであるが, その後, 佐多岬と天草島から記録され, 島原半島でも採集された。外観は, 翅鞘に毛斑が全くなく, 特異な種類と考えられがちであるが, 雄交尾器の形や腹部末節端の形などはヤクシマクリタマムシにとってもよく似ていて, 区別に苦しむほどである。

27-5. *T. sp.* ヤエヤマクリタマムシ 分布：琉球（八重山諸島，与那国島）。ヤクシマクリタマムシによく似ているが，体色が真鍮色を帯びた唐金色で銅赤色を帯びず，翅鞘は紫色を帯びることがない。石垣島と与那国島で採れた数頭を検した。プラーグの国立博物館に *T. miwai* OBENBERGER と云う OBENBERGER 自身の同定ラベルのついた「模式標本」が1頭ある。西表島で平山沢之助氏が1932年5月に採集したものであるが，この種名は OBENBERGER 存命中には発表されることがなかった。従って，現在のところ本種は未命名である。

29-1. *Coraebus hastanus* CASTELNAU et GORY, 1839 ミドリナカボソタマムシ

分布の北限は奄美大島と喜界島であるが，吐喝喇諸島ではまだ採れていない。

29-3. *C. niponicus* LEWIS, 1894 ルリナカボソタマムシ

鹿児島県の甌島にも産する。これが分布の北限である。

29-5. *C. quadriundulatus* MOTSCHULSKY, 1866 シロオビナカボソタマムシ

OBENBERGER は1914年に中国の山東省膠州から *C. staudingeri* を記載し，日本からその変種 *nipponicola* を記載した。しかし，彼自身 JUNK の甲虫目録の中で *staudingeri* も *nipponicola* も共に日本産の *quadriundulatus* の変種とした(1935)。私は1953年に記載だけによって *nipponicola* は *quadriundulatus* そのものであり，*staudingeri* は *quadriundulatus* の青紫色を帯びたものに当てた。前回の解説の中では，*staudingeri* は他の同属の種類と同様に野外における生き残りの個体ではないかと記しておいた。しかし，1973年春にプラーグの国立博物館で検した *C. staudingeri* の模式標本は翅端の形が日本産のものと多少異っていた。従って，*staudingeri* OBENBERGER, 1914 は本種の大陸産の亜種を代表するものであろう。四川省から記載された *C. szechuanensis* OBENBERGER, 1934 とその変種 *tatsienluis* OBENBERGER, 1934 もその模式標本は *staudingeri* と大差がない。恐らく同一種であろう。インド東北部から記載された *C. suturalis* KERREMANS, 1893 も恐らくは *staudingeri* と同一種と思われるが，模式標本を検してないので詳細な点が判らない。

29-7. *C. rusticanus* LEWIS, 1892 ルイスナカボソタマムシ

成虫はミヤマハンノキヤヤマハンノキ，伊豆諸島ではオオバヤシヤブシなどハンノキ属の植物の葉上に発見されるが，戦前に私は山形県飯豊山の大蔵尾根でブナの生木の幹に止っている本種数頭を採集したことがある。この事は偶然のことと思いつまにしていたが，今年，福島県の田添京二教授からお聞きした所では，同氏もブナの幹から本種を，それも一度ならず採集されているとのことである。あるいは，本種の加害植物としてブナも加える必要がある

のかも知れない。

29-8. *C. ignotus* E. SAUNDERS, 1873 カラカネナカボソタマムシ

琉球列島内の分布の南限は奄美大島であったが，沖縄本島にも産する。亜種は奄美大島の亜種 *shibatani* Y. KUROSAWA, 1963 と同じである。徳之島などの中間の島にも産するであろう。

29-9. *C. kiangsuanus* OBENBERGER, 1934 シリグロナカボソタマムシ

札幌円山から記録された。私は小樽産の標本の写真を見せられたことがある。

29-10. *C. lochooensis* KANO, 1929 オキナワナカボソタマムシ

藤田宏氏によって3が記録された Elytra, 1976, 3)。

29-11. *C. sp.* オオシマナカボソタマムシ 分布：琉球（奄美大島）。体長9mm内外，カラカネナカボソタマムシの奄美亜種に似るが，細形で，翅鞘は紫色を帯び，毛斑は淡色で形が異なる。奄美大島でごくわずかの個体が採集されているだけである。未記載種である。

29-12. *C. sp.* ヒメナカボソタマムシ 分布：琉球（奄美大島）。体長4mm内外，一見 *Sambus* 属や *Nalanda* 属に似る。銀灰色毛でおおわれるが，濃淡属に似る。銀灰色毛でおおわれるが，濃淡があり，その中に銀白色毛の不明瞭な模様がある。翅端は円い。稀な種類で未記載。

29-13. *C. sp.* ヤエヤマヒメナカボソタマムシ 分布：琉球（八重山諸島）。体長4mm内外，前種によく似ているが，一様に灰色毛におおわれ，斑紋はほとんど見当たらない。あるいは前種の亜種とした方が妥当かも知れないが，一応別種としておく。やはり未記載種である。

29-14. *C. formosanus* MIWA et CHŪJŌ 1935 タイワンナカボソタマムシ 分布：琉球，（奄美大島，沖縄本島，石垣島，西表島）台湾。体長10mm内外。秋山黄洋氏が日本領からはじめて記録した種類である（本誌29/30号，1974）が，それに記載と写真が付いているので，記載は省略する。シイ類につくのではないかと思われるが確認はない。

30-3. *Nalanda rutilicollis* (OBENBERGER, 1914) ムネアカチビナカボソタマムシ

分布の北限は福島県の太平洋岸地方にまで拡った。前回は琉球列島と台湾のものを亜種 *formosana* OBENBERGER, 1944 としたが，その模式標本を調べたところ，本種ではなく，台湾の中南部にいる，KERREMANS, 1912 が *Meliboeus saundersi* KERREMANS, 1892 の種名で記録した種に当たることが判った。従って，奄美大島以西の琉球列島のものは亜種名がなくなるわけである。これは日本内地産のものより前胸背の色が明るく，後縁部の皺の配列が多少異なる。吐喝喇列島の口之島のは屋久島のもとの大差がないが，中之島のは前胸背の色は奄美大島のものに近く，皺は内地型である。八重山諸島のものは前

胸背の色が唐金色を帯びた緑で、他島のものから区別できる。

31-1. *Sambus quadricolor* E. SAUNDERS, 1873
アヤマナビロタマムシ

八重山諸島産のものは翅鞘の斑紋が異なり、一見別種のようにさえ見える。亜種として区別する必要がある。

31-2. *S. sp.* ヤエヤマナビロタマムシ

前回フィリピンから記載された *S. aeneicollis* FISHER, 1921 に同定して八重山諸島の石垣島からはじめて記録したが、真の *aeneicollis* と思われる標本と比較したところ、頭部の突出が弱く、別種と考えられる。石垣島の標本の他に、西表島では私自身で採集しているし、与那国島からも記録された(秋山黄洋, *Elytra*, 1976, 3, p. 26)。また、私は宮古島の2♂2♀(Karimata, 27. vi. 1974, 木元新作採集)を検した。三輪勇四郎、中条道夫両博士が種名だけ記録した *Sambus yushiroi* OBENBERGER は、三輪博士が OBENBERGER に同定のため送った標本に対する返信に基いて記録されたものと思われるが、この様な種類は OBENBERGER の存命中には記載されずにしまったので、この名は無効名である。OBENBERGER の標本の中には *S. yushiroi* m. の同定ラベルがつき“Joromote, Loochoo, 28. vii. 1932, S. Hirayama”のラベルがついた1頭の標本があった。この標本は正しく、私が *S. aeneicollis* FISHER とした種類であった。

第17・18号掲載分

33. Genus *Agrilus* CURTIS, 1825 ナガタマムシ属 番号を29に誤ったが33が正しい。

33-6. *A. asiaticus* KERREMANS, 1898 オオウグイスナガタマムシ

藤田宏氏は東京都下から記録した(*Elytra*, 1976, 3, p. 27)が、私は福島県東部産の標本を検した。詳細は田添京二氏が発表されるであろう。

33-9. *A. auropictus* KERREMANS, 1912 キンモンナガタマムシ

今回は subsp. *kanohi* Y. KUROSAWA, 1954 は区別する必要はないとしたが、沖縄以北のものは前胸背が黒味がかり、翅鞘に唐金色の光沢がある点でやはり区別しておいた方がよいであろう。八重山諸島産は前胸背に青味が強く、翅鞘も青味がかかる点で台湾のものに似ているが、台湾のものより青味が強く美しい。

第21・22号掲載分

33-14. *A. daimio* OBENBERGER, 1936 ダイミョウナガタマムシ

模式標本は Japan と云うラベルのついた♀である。

第23・24号掲載分

33-26. *A. kurumi* Y. KUROSAWA, 1957 クルミナガタマムシ

別項に記録されるように入江平吉氏によって北海道で採集された。

33-32. *A. marcopoli* OBENBERGER, 1930 アオナガタマムシ

最近四国剣山から記録された(小笠原隆, *Elytra*, 2, p. 12, 1974)。これで北海道から九州までの主要島に分布することになった。

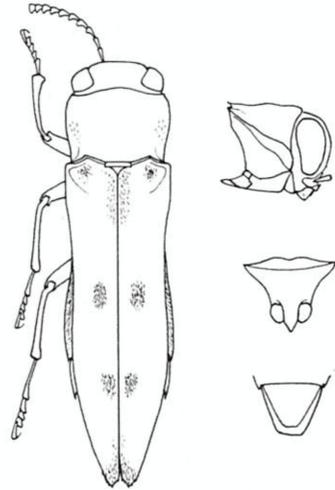
33-37. *A. okinawensis* MIWA, 1933 オキナワナガタマムシ

秋山黄洋氏は加害植物としてクロヨナを報じた(本誌29/30号, p. 4 1975)。

第27・28号掲載分

33-57. *A. rokuyai* Y. KUROSAWA, 1976 トガリカラカネナガタマムシ 分布: 日本(本州)。体長7.5mm内外、暗い唐金色、前胸背はやや緑色、翅鞘はやや赤味を帯びる。翅鞘に各3個の毛斑があり、翅端は鋭角に終る。原色日本昆虫図鑑Ⅱ, 甲虫編, pl. 76. fig. 23 に *A. japonicus* KERREMANS と誤って同定して掲載した種類であるが、*japonicus* は *A. tibialis* LEWIS, 1893 のシノニムであるので、新種で記載した。兵庫県 Ikada, 広島県 Kake, 長野県裾花峡と有明産の標本を検した。

本種は台湾にも産し亜種を異にするので、別亜種 *mushanus* Y. KUROSAWA, 1976 として区別した。



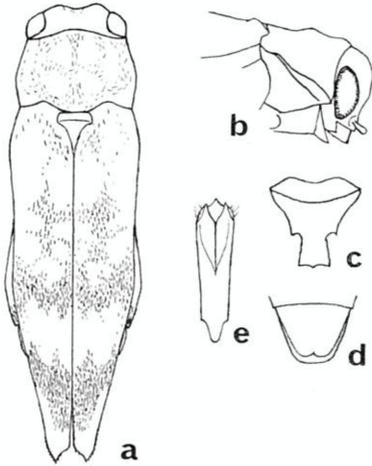
第33図 トガリカラカネナガタマムシ
Agrilus rokuyai Y. KUROSAWA

33-58. *A. undulatifemur* Y. KUROSAWA 1976 ウンモンナガタマムシ 分布: 日本(屋久島), 台湾。体長7.8~9.1mm, 黒色, 頭胸部は赤紫色を帯び翅鞘には銀白色短毛からなる雲状毛斑がある。翅端は鋭角で尖る。屋久島産の標本に基いて記載した種類であるが、台湾にも同じ種類がいて、屋久島のものと区別出来ない。

第31・32号掲載分

37-3. *Aphanisticus* SP. チュウジョウケンタマムシ

今回は中条道夫博士の記録に従って、*A. fossilidiscus* OBENBERGER, 1944 としたが、その後、中



第34図 ウンモンナガタマムシ
Agrilus undulatipennis Y. KUROSAWA

国福建省産の *fossidiscus* の模式標本と比較することが出来た。その結果、沖縄本島産の標本は *fossidiscus* とは異なる種類であることが判ったので、ここでは一応別種としておく。

○上甌島から未記録の甲虫類(4)

上甌島産カミキリムシ類に関しては、坂元久米雄・嶋 洪(1965: 鹿児島県のカミキリムシ, SATSUMA, 13(3): 85)によるアオスジカミキリ *Xystrocera globosa* OLIVIER の記録が最も古く、次いで田中洋海(1973: 甌島採集報告, Leben(11): 40-54)によって9種が報告されている。これら10種の記録は後に田中 洋(1974: 昆虫, 甌島自然公園候補地学術調査報告書: 27-56)によって引用されている。一方、草間慶一は「日本産カミキリムシの生態と分布一覧表(1974: 新しい昆虫採集案内 III)」においてカミキリムシ42種の新分布地として甌島をあげている。しかしこの記録には甌島諸島のどの島か明確なデータは示されていない。そこで、筆者は上記の田中 洋の報告には見られない下記のカミキリムシを記録しておく。

1. *Marthaleptura scotodes* (BATES) ツヤケシハナカミキリ
1頭, 里, 30. iv. 1975, 筆者採集。
2. *Bumetopia japonica* (PASCOE) ウスアヤカミキリ
1頭, 里, 30. iv. 1975, 筆者採集。
3. *Pothyne silacea* PASCOE シロスジドウボソカミキリ
1頭, 里, 30. iv. 1975, 筆者採集。

なお、末尾ながら貴重な文献を貸与された東洋大学教授大野正男及び種々御教示をいただいた東京農業大学助教授渡辺泰明両氏に厚く御礼申し上げる。
(松浦園芸高校, 吉田喜美明)

第33号掲載分

41-b-10. *Habroloma (Parahabroloma) yuasai* Y. KUROSAWA, 1976 ナガヒラタチビタマムシ

前回未命名種で記録した種類であるが、故湯浅啓温博士を記念して命名した。

41-b-11. *H. (P.) atronitida* GEBHARDT, 1928 ヒメヒラタチビタマムシ 分布: 日本(本州, 四国, 九州)。プラーグの国立博物館の標本を lectotype に指定したので、上記の種名になった。

第35号掲載分

42-10. *Trachys pseudoscrobiculata* OEBENBERGER, 1940 クロチビタマムシ

私の勘違いでスペルを *pseudoscurobiculata* としてしまったが、これは上記のスペルが正しい。文中の *T. scrobiculata* も同様に *scrobiculata* の誤りである。

42-14. *T. pecirkai* OEBENBERGER, 1925 キタドワイロチビタマムシ

前回に本種の種名にした *T. semenovi* OEBENBERGER, 1929 は *pecirkai* OEBENBERGER, 1925 の方が先なので、当然この方を用いなければならない。この誤を指摘された秋山黄洋氏に深謝する。

(国立科学博物館)

○コモンホシハナノミ台湾に産す

コモンホシハナノミ *Hoshihananomia borealis* NOMURA は最初、1957年に伊豆諸島八丈島と熊毛諸島屋久島の標本を基にコーシュンシラホシハナノミ *H. composita* (WALKER) の亜種として記載されたもので、その後奄美大島からも記録され、また1966年に野村 鎮氏によって独立種に昇格させられた。1975年には筆者が1頭の♀の採集品を基に八重山諸島西表島を新分布地として追加した(ELYTRA, 3(1/2), p. 16)が、従来の分布型から考えれば意外な採集例だったためにラベルの付け誤りなどの不安もなくはなかったところ、本年東京農大の久保田正秀氏の御好意で松本俊信氏採集の台湾産の本種の標本を譲り受けることができた。ここに本種を台湾から記録するが、これに先だち、台湾産の多数の貴重な標本を恵与いただいた久保田・松本両氏に厚くお礼申しあげる。

1♀, 台湾蓮華池, 23. vi. 1975, 松本俊信採集。
本種は和名が示すように、日本産本属中においては大型な体の割にもっとも上翅の斑紋は小さいもので、特に♂においては著しい。しかし、台湾産と西表島産の♀、特に台湾産においては奄美大島以北の♀と比較すると、前胸背および上翅の白紋は明らかに大きく発達している。

なお本種は、コーシュンシラホシハナノミと斑紋の出方は似ているものの別の種群に属するようで、現在のところもっとも近縁な種は中国福建省から記載された *Hoshihananomia kuatunensis* ERMISCH と思われる。
(横浜市金沢区, 高桑正敏)

日本産 *Pidonia* 属の覚え書(9)
Pidonia の訪花性について

窪木 幹夫

ハナカミキリ亜科やカミキリ亜科の多くのカミキリムシにとって、訪花は摂食と交尾に欠くことのできない重要な習性である。訪花中のカミキリムシの行動を観察すると、雄ずいの蕊から花粉を食べていたり、雄ずいの基部に口器を入れて蜜を吸っていたりする。

Pidonia の後食の対象は、*Pidonia* の消化管内から多数の花粉が発見されることから、花粉の摂食にあると思われるが、花蜜とどちらが重要であるかは未調査である。このようなカミキリムシの後食は、生殖器官の発達に関係していると考えられている。また、交尾の点からみても、フトカミキリ亜科の交尾は一般に幼虫期の食樹の上で行なわれるといわれているが、訪花性のカミキリムシ類のそれは花上が重要な交尾の場になっている(LINSLEY, 1961)。このように、訪花は成虫の栄養や交尾にとって重要である。さらに、これら訪花性のカミキリムシ類は、種により特定の花を選択し訪花することが知られている。たとえば、フタスジカタビロハナカミキリ *Evodinus bifasciatus japonicus* が早春に山地帯の森林に咲くヤマシャクヤク *Paeonia japonica* の花で採集されることはよく知られている。また、*Pidonia* 類がカエデ類、クリ、サワフタギ、ヤグルマソウ、オニシモツケ、ショウマ類に訪花することは周知のことである。しかし、訪花する *Pidonia* の種類とその個体数は花の種類との関係ばかりでなく花をとりまく環境と気象条件などに影響されているようである。本報告は、ヤグルマソウ *Rodgersia podophylla* とガマズミ *Viburnum dilatatum* の2種の花を選びさらに飛来する種類と個体数について予備的

に調査を行なったものである。

調査年月日：1975年6月25日

調査地：山梨県大菩薩嶺上日川峠(標高約1600m)

なお、調査当日は朝のうち曇りでのち晴れとなった。調査に同行され御協力をいただいた東大阪市の柴田孝尚氏に感謝する。

上日川峠付近は温帯林上部に位置し、主としてブナより成る広葉樹林からなり、一部ウラジロモミを含んでいる。本調査と並行して行なった垂直分布調査(1200~1900m)により、上日川峠付近には12種の *Pidonia* の生息が確認されたが、調査した2種の花には7種の *Pidonia* が飛来した。これらのうち、*P. debilis* は両方の花に飛来したが、残りの6種はどちらか一方の花にのみ飛来した。*P. simillima*、*P. insuturata*、*P. oyamae* はヤグルマソウに、*P. puziloi* はガマズミに、それぞれ嗜好しているといえそうである。なお、*P. amentata* と *P. maculithorax* は、ともに1個体であったがガマズミに訪花していた。調査した2種の花は、直線にして約20mほど離れた地点で開花しており、ヤグルマソウは直射日光の当たらない日影の林床に、一方ガマズミは樹高3mほどで日当りの良い状態で咲いていた。この差が飛来傾向に表われたのかと考え、その他にも道路沿いの日向に咲いたヤグルマソウを調べた所、日影のそれと同様に *P. simillima*、*P. insuturata*、*P. oyamae*、*P. debilis* の飛来を確認したが個体数はやや少なかった。このように、日向と日影の異なった環境条件を超えて、ある種あるいはあるグループの *Pidonia* が同一種の花に飛来するこ

表1. 2種の開花植物への *Pidonia* の訪花個体数

種名	植物 時刻 気温	ヤグルマソウ				ガマズミ			
		7:30	10:30	13:30	16:30	7:30	10:30	13:30	16:30
		16°	17°	16°	14°	17°	18°	17°	15°
<i>P. simillima</i>	♂	2	1	4	1	0	0	0	0
	♀	1	1	2	1	0	0	0	0
<i>P. insuturata</i>	♂	1	2	2	1	0	0	0	0
	♀	3	5	2	1	0	0	0	0
<i>P. oyamae</i>	♂	5	5	2	0	0	0	0	0
	♀	4	5	0	0	0	0	0	0
<i>P. debilis</i>	♂	0	1	1	0	1	0	0	2
	♀	0	1	2	0	2	1	2	0
<i>P. puziloi</i>	♂	0	0	0	0	3	1	3	0
	♀	0	0	0	0	3	3	0	0
<i>P. amentata</i>	♂	0	0	0	0	0	0	0	1
	♀	0	0	0	0	0	0	0	0
<i>P. maculithorax</i>	♂	0	0	0	0	0	0	0	0
	♀	0	0	0	0	1	0	0	0
合	計	16	21	15	4	10	5	5	3

とは、雄と雌が出合う確率が高くなり、交尾する機会を増やすことになるだろう。一方、訪花を飛来個体数の増減から考えると、この調査では個体識別はしていないが、日の出から3時間経過した7時30分で、すでにヤグルマソウとガマズミの花上にかんりの *Pidonia* が飛来していた。これは *Pidonia* の活動が早朝から始まることを意味している。その後ガマズミは直射日光(10時30分で25.9°C)を受け *Pidonia* の飛来数は急激に減少するが、一日中直射日光を受けず比較的環境の変化が少ないと考えられる日影のヤグルマソウは、その後も飛来数が増加している。このように、*Pidonia* の訪花は個体数の増減などの量的な面において、温度、照度、湿度などが関与しているらしい。

以上、*Pidonia* の訪花性に関して、*Pidonia* の種により花(植物の種類)の選択性がある傾向を示す一調査結果を報告した。花上の時刻による個体数の変化については *Pidonia* の活動性の違いや花をとりまく環境要因の日周変化によるものと思われる。また、このような現象が他地域において、異なった樹相において、また植物の種の組み合わせが異なる場合、あるいは同一地域においても季節的にどのように変わるか興味があり今後とも調査を続けたい。

(東京農大)

○シュロゾウムシの採集記録

シュロゾウムシ *Derelomus uenoi* MORIMOTO, 1959 は京都、山口県光、福岡から採集された個体に基つき森本氏によって記載されたシュロ *Trachycarpus excelsa* 及び近似種のトウジュロ *T. Fortunei* の花柄を食害するゾウムシである。1959年に本種が記載されてからすでに17年が経過したが、体長が4.5 mm ほどの微小なことと生息環境が特異であることなどが影響してか、この間、本種に関する報告は筆者が調べた限り皆無であった。しかしながら今回、東京農大昆虫学研究室の立川周二氏、水戸昆虫研究会の小倉健夫、小山 敦、渡辺 健、西山 明の各氏によって東京、茨城、福島各都県から採集された本種を恵与され、さらに小山 敦氏からは本種が燈火に飛来したという報告を受けた。そこで、本種の採集例とともに若干の生態的知見を加え報告したいと思う。なお、この報告をするにあたりデータを提供して下さった上記諸氏、いつも御指導下さる東京農大の渡辺泰明助教授、写真の撮影で御世話になった鈴木 互氏にお礼申し上げる。

1. 東京都下高尾山(標高300m 付近) 6. ix. 1974, 立川周二採集。

シュロの花柄1本の



中に50頭前後の成虫、30数頭の幼虫、若干の蛹が生息していた。成虫を花柄から採取した後、幼虫、蛹を花柄の中に残したまま空箱に入れ室内に放置しておいたところ11月初旬までに続々と成虫が羽化してきた。12月に再び花柄を割ってみるとまだ若干の幼虫、蛹が残っていた。しかし残念なことにその時、これらのすべてを液漬標本にしてしまったため、越冬態のステージを確認することはできなかった。しかし立川氏によれば樹皮下で成虫越冬し5月頃にはシュロの周囲を飛び廻るのが観察されたという。

2. 茨城県水戸市, 128頭, 27. x. 1974, 小倉健夫, 小山 敦, 渡辺 健採集。シュロの花柄より。

1頭, 30. iv. 1975, 小山 敦採集。燈火に飛来。

3. 茨城県久慈郡西金, 28頭, 21. iii. 1976, 渡辺 健採集。

シュロの花柄で越冬中の成虫を採集したが、その際幼虫及び卵を確認したという事である。

4. 福島県矢祭山, 32頭, ix. 1975, 西山 明採集。

なお、シュロは南九州を原産とする暖地性の植物であるが、観賞植物として東北地方にまで栽植されているため、おそらく本種はシュロと分布を同じくするものであろうと推測される。

(東京農大, 久保田正秀)

○ミスジナガクチキムシ富士山の記録

Stenoxylita trialbofasciata (HAYASHI et KATO) ミスジナガクチキムシは、群馬県武尊山、長野県木曾駒ヶ岳、長野県新開村栃木、岐阜県上宝村平湯、静岡県天城山から記録されている。筆者は、従来未記録と思われる富士山で本種を得たので、新産地として報告しておく。

1頭, 山梨県鳴沢村富士山, 12. viii. 1976, 筆者採集。

また、既に記録されている場所であるが採集例の少ない種なので、手元にある下記の採集例も報告しておく。

4頭, 群馬県片品村武尊山, 14. vii. 1975, 筆者採集。(福岡県宇美町, 入江平吉)

○奥多摩のフジコバヤハズカミキリの記録

フジコバヤハズカミキリ *Mesechthistatus fujisanus* HAYASHI を奥多摩で採集したので報告する。

1♂, 奥多摩日原本谷林道奥(標高1050 m), 30. v. 1976, 楠嘉 博採集。

従来、東京都下における採集例は少ないもののように、筆者らは雲取山の1頭(小宮次郎, INSECT MAGAZIN, No. 70, p. 17, 1967)しか知らない。

なお、同地ではセダカコバヤハズカミキリ *Parcechthistatus grossus* (BATES) も分布するが、両種が混棲しているかどうか興味もたれる。一般に奥多摩・大菩薩ではフジコバヤハズカミキリがより高標高地、セダカコバヤハズカミキリがより低標高地から採集されているが、両種の混棲はまだ確認されていない。(東京農大, 楠 嘉博, 妹尾俊夫)

屋久島から新たに記録されるアオゴミムシ

須賀 邦 耀

前号に記事が掲載されていた、本年7月の本会の蔵王山採集会の折に、仙台の渡辺 徳氏が屋久島で採集された標本を拝見する機会を得たが、その中にアオゴミムシ類の珍種を見出したので報告する。

Chlaenius (Pachydinodes) leucops WIEDEMANN

アングロアオゴミムシ, 1 ♂, 24. vii. 1974, 屋久島小瀬田, 渡辺 徳採集所蔵。

体長 12.8~14.0 mm, 体幅 5.2~5.6 mm, 黒色, 頭部および前背板は銅色を帯び, 個体によっては軽い緑色の光沢がある(この標本ではほとんどない)。上翅は暗い銅色を帯び, 時に青銅色を帯びる。上唇, 大腮, 両鬚, および触角は暗赤褐色, 脚は暗赤色であるが, ほとんど黒色に近い。体下は黒色で光沢がある。

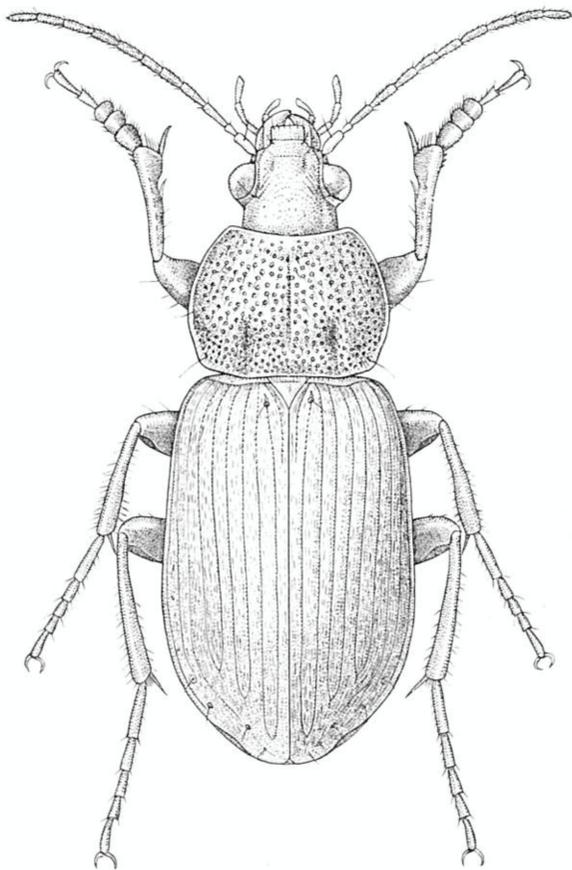
我国に産するアオゴミムシ類の中では *C. abstersus* BATES ハラグロアオゴミムシ(エビアカガネゴミムシ)に最も近似しているが, 両鬚, 触角が暗色で脚はほとんど黒色に近く, 体形はやや細型, 前胸背の点刻は大きくやや密毛があり, 上翅端は先端部が明瞭に湾入するなどの点で容易に区別される。

JEANNEL は南ヨーロッパと地中海地域に分布する *Dinodes* 亜属に近いとし, 彼の著書「マダガスカルの歩行虫類」の中では, 本種を触角第3~4節の形状によって *Pachydinodes* 亜属に含めている。この

亜属に属する種類は, 我国ではアトワアオゴミムシ, ムナビロアトボシアオゴミムシおよび前記ハラグロアオゴミムシがある。

本種の生態についてはよく判っていないが, 今までの採集例はほとんどが灯火に飛来したものである。

今回の標本は屋久島の小瀬田にある放牧地の荒地の外側に設置したトラップに来たもので, 灯火以外で採れた最初の例であろう。この環境はハラグロアオゴミムシやヨーロッパの *Dinodes* 亜属の種類が好んで棲むやや乾燥した草地の環境に似ている。本種もやはり乾燥した環境を好むものであろうか。本種は, インド, セイロンからインドシナ半島を経て, モルッカ諸島やフィリピンに至る東洋熱帯に広く分布する。日本から最初に記録したのは土生利申博士である(あきつ, 1957, 6. pp. 16~19)。大分市で採集された1 ♂と福岡県浮羽郡吉井町で行徳直己氏が採集された1 ♂1 ♀に基くもので, この他に広島でも戦前に採集されたという。筆者の知り得た分布の北限は京都で, 未



発表ではあるが, 上野俊一博士が京都大学構内の街灯で採集された1頭を検した。

なお, 貴重な標本を検する機会を与えて下さった渡辺 徳氏に深謝する。(東京都世田谷区)

— < 連絡・報告 (1) > —

◇日本産甲虫目録の発刊について

かねて世話人一同で検討していた「日本産甲虫目録」はようやく体裁も決り, いよいよ発刊の運びとなりました。原稿の到着順に順次発行致しますが, 年内にはハンミョウ, ホソガムシ, ツヤガムシ, ク

ワガタムシ, クロツヤムシ, ヒラタドROMシ, チビドROMシ等の各科の印刷が終了致します。分譲価格等の詳細は追って連絡申し上げますが, 会員に対しては割引措置を考慮致しますので御期待下さい。

(世話人一同)

群馬県菅沼におけるハナカミキリ類の訪花性について

(特に *Pidonia* について)

斎藤秀生,¹⁾ 倉田悦子,²⁾ 星野晴美,²⁾

カミキリムシの訪花習性については、経験的に種々の事柄が知られているが、それらの知見は断片的に記録されているのみで、まとまった報告は少ない。

渡辺弘之(1969・1976)は、京都の芦生演習林内の花に集来するハナカミキリ類の活動について調査し、いくつかの興味ある事実を指摘している。筆者等も、かねてからハナカミキリ類の訪花性について関心を持ち、種によって訪花の嗜好性が認められるのではないかと考え、下記の様な調査を行ったので、その結果について報告したい。

調査時期： 第1回調査、1976年7月28日午前9時—午後1時、晴れたり曇ったり。

第2回調査、1976年8月1日午前10時—午後2時、晴れ。

調査地域： 群馬県利根郡片品村菅沼(1750m)。当地は典型的なシラビソ・オオシラビソ群の原生林で、地表にはクマザサが密生しており、所々にハリブキ・ヤグルマソウ・オニシモツケ・ヤマブキショウマなどが自生し、針葉樹の枯木にはゴトウズルガ

巻き付いている。これらの花は、常により高い針葉樹の枝や葉によって直射日光を遮られている。

調査範囲は、この樹林間を通る山路の約1000mと定めた。

調査方法： 調査範囲内をそれぞれ手分けして歩き回り花上に集来したカミキリムシをすべてネットで採集した。さらに、採集個体を花の種類ごとに分け、それぞれ集来したカミキリムシの種数及び性別の個体数を記録した。

以上のような調査で得たデータは別表のとおりである。

調査結果： 7月28日の第1回目の調査結果は表1に示す通りである。

本調査地域ではハナカミキリ類の訪花植物としては、ヤグルマソウ、ゴトウズル及びオニシモツケの3種が圧倒的に多く、それぞれ総個体数の30.2%、33.4%、35.3%を呈しシシウド、ショウマ類、イタドリ及びキイチゴ等には僅かの個体が見られたに過ぎない。

第1表 各種植物に訪花したハナカミキリ類の種類と個体数(1976年7月)

植物名 種名	性別	ヤグルマソウ			コトウズル			オニシモツケ			シシウド			ショウマ類			イタドリ			キイチゴ			種別 合計	種別 %
		♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計		
<i>P. maculithorax</i>		21	5	26	66	26	92	180	75	255	2	3	5	1	0	1	0	0	0	0	2	2	381	26.0
<i>P. obscurior</i>		103	14	117	41	12	53	18	6	24	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	195	13.3
<i>P. debilis</i>		43	27	70	39	42	81	12	12	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	175	12.0
<i>P. mutata</i>		16	3	19	78	7	85	41	22	63	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	169	11.5
<i>P. insaturata</i>		43	17	60	14	11	25	16	8	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	109	7.5
<i>P. testacea</i>		57	17	74	25	1	26	0	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	105	7.2
<i>P. matsushitai</i>		10	0	10	39	3	42	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	55	3.8
<i>P. oyamae</i>		29	5	34	10	3	13	3	2	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	52	3.6
<i>P. sp</i>		0	0	0	15	0	15	20	8	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	43	2.9
<i>Pidonia</i> 合計				410			432			431			5		3			1		2		1284	87.6	
花別パーセント				31.9			33.6			33.6			0.4		0.2			—		0.1				
<i>G. dolis</i>		15	3	18	12	5	17	13	3	16	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	53	3.6
<i>M. scotodes</i>		2	5	7	1	11	12	8	19	27	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	47	3.2
<i>L. arcuata</i>		2	1	3	1	2	3	15	30	35	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	43	2.9
<i>S. tenuis</i>		0	0	0	8	6	14	2	5	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	21	1.4
<i>E. borealis</i>		0	5	5	1	4	5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	11	0.8
<i>G. chalybeella</i>		0	0	0	1	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0.2
<i>A. cyanea</i>		0	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.1
<i>P. femoralis</i>		0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	—
<i>Pidania</i> を除くカミキリ合計				33			86			57			4		1			0		0		181	12.4	
総計				443			489			517			9		4			1		2		1,465		
花別パーセント				30.2			33.4			35.3			0.6		0.3			—		0.1				

第2表 各種植物に訪花したハナカミキリ類の種類と個体数(1976年8月)

種名	ヤグルマソウ			ゴトウズル			オニシモツケ			シンシウド			イタドリ			種別個体数合計	種別%
	♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計		
<i>P. maculithorax</i>	1	0	1	26	2	28	153	89	242	16	9	25	0	1	1	297	28.3
<i>P. debilis</i>	6	10	16	28	8	46	34	33	67	4	2	6	0	0	0	135	12.9
<i>P. insuturata</i>	8	2	10	8	3	11	43	43	86	2	3	5	0	0	0	112	10.7
<i>P. mutata</i>	0	1	1	33	8	41	18	22	40	3	1	4	1	1	2	8	8.4
<i>P. obscurior</i>	11	0	11	7	0	7	38	10	48	5	2	7	0	0	0	73	7.0
<i>P. testacea</i>	3	2	5	0	3	3	22	17	39	0	0	0	0	0	0	47	4.5
<i>P. sp.</i>	0	0	0	5	1	6	24	8	32	1	0	1	0	0	0	39	3.7
<i>P. matsushitai</i>	1	0	1	10	0	10	22	2	24	3	0	3	0	0	0	38	3.6
<i>P. oyamae</i>	2	1	3	0	5	5	6	7	13	0	1	1	0	0	0	22	2.1
<i>Pidonia</i> 合計			48			157			591			52			3	851	81.2
花別パーセント			5.6			18.4			69.5			6.1			0.4		
<i>M. scotodes</i>	0	0	0	0	0	0	29	17	36	21	15	36	4	3	7	79	7.5
<i>G. dolis</i>	0	0	0	4	3	7	18	8	26	9	3	12	1	1	2	47	4.5
<i>L. arcuata</i>	0	0	0	2	0	2	8	14	22	18	4	22	1	0	1	47	4.5
<i>S. tenuis</i>	0	1	1	2	0	2	3	3	6	0	3	8	1	2	3	15	1.4
<i>E. borealis</i>	0	0	0	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	2	0.2
<i>G. chalybeella</i>	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	1	1	0	0	0	2	0.2
<i>B. pyrrha</i>	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0.1
<i>T. reini</i>	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0.1
<i>A. monticola</i>	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0.1
<i>J. cometes</i>	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0.1
<i>C. japonicus</i>	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0.1
<i>Pidonia</i> を除くカミキリ 合計			1			11			97			75			13	197	18.8
総計			49			168			688			127			16	1,048	
花別パーセント			4.7			16.0			65.7			12.1			1.5		

ハナカミキリ類の集来が最も多かった上記の3種の花について飛来総個体数を比較した場合、大差は認められない。しかし種別による飛来個体数について検討すると *maculithorax*, *testacea*, *oyamae*, *matsushitai* 及び *sp.** の各種は訪花植物の差異によって個体数の違いが認められた。すなわち、*maculithorax* はヤグルマソウ<ゴトウズル<オニシモツケという傾向を表わしている。これに対し *testacea*, *oyamae* では、ヤグルマソウ>ゴトウズル>オニシモツケとなっており、*maculithorax* の場合と正反対になっている。また *matsushitai* では、ゴトウズル>ヤグルマソウ>オニシモツケの順を示し、*sp.** ではヤグルマソウの訪花がまったく見られなかった。なお、他の *Pidonia* 各種においても上記の種ほど訪花個体数に顕著な差異は認められなかったが、訪花植物が異なった場合には訪花個体数も一様でない傾向が見られた。

一方、8月1日の第2回目の調査結果は表2に示す通り、ハナカミキリ類の訪花総個体数に大きな差異が見られ、オニシモツケに最も多くの個体が集来していた。それに対しヤグルマソウでは総個体数の僅か4.7%、ゴトウズルでも16.0%と、オニシモツケの65.6%に比べはるかに減っていた。また第1回目

の調査では、ごく少数の *maculithorax*, カラカネハナカミキリ, ヤツボシハナカミキリの訪花しか見られなかったシンシウドに、第2回目の調査では、ハナカミキリ類の種数及び個体数ともに大幅に増加し、総個体数の12.1%となっていた。これは、ヤグルマソウ, ゴトウズルの開花がともに下火になり、それに反してシンシウドの開花が始まった為と考えられる。

同様なことが *Pidonia* についても認められ *mutata* を除いたすべての種が、オニシモツケに最も多い個体数を示している。*maculithorax* はオニシモツケ>ゴトウズル>シンシウド>ヤグルマソウの順で、シンシウドを除けば第1回目の調査と同様である。*sp.** についてもシンシウドへの訪花が見られたがやはり第1回目の調査と同様でヤグルマソウにはまったく見られなかった。*testacea*, *oyamae* は第1回目の調査においては、ヤグルマソウに最も多く、ついでゴトウズル, オニシモツケであったが、第2回目の調査では、ヤグルマソウよりもオニシモツケに多くの個体が集来していた。同様に *matsushitai* につい

* 本種は *P. mutata* に近縁の種と考えられるが、詳細については窪木幹夫氏によって報告される予定である。

第3表 *Pidonia* 各種の雌雄別訪花個体数

種名	7月調査			8月調査			合計		
	♂	♀	計	♂	♀	計	♂	♀	計
<i>P. maculithorax</i>	270	111	381	196	101	279	446	212	678
<i>P. obscurior</i>	162	33	195	61	12	73	223	45	168
<i>P. debilis</i>	94	81	175	72	63	135	166	144	310
<i>P. mutata</i>	136	33	169	55	33	88	191	66	257
<i>P. insuturata</i>	73	36	109	61	51	112	134	87	221
<i>P. testacea</i>	82	23	105	25	22	47	107	45	152
<i>P. matsushitai</i>	52	3	55	36	2	38	88	5	93
<i>P. oyamae</i>	42	10	52	14	8	22	50	24	74
<i>P. sp.</i>	34	8	43	30	9	39	65	17	82
合 計			1,284			851			2,135

ても、ゴトウズルよりオニシモツケにより多くの個体が見られた。

この様な現象は上記の *Pidonia* 各種の訪花が、訪花植物の開花時期にあわせて花の生理的活性が落ちたヤグルマソウから花の最盛期であるオニシモツケに移行した様に考えられる。しかし、花の置かれた物理的環境及び花の生理的条件等も考慮した上で、総合的に検討する必要があると思われる。

なお、*Pidonia* 各種における訪花個体数の優占順位は、第1回及び第2回の調査を通じて顕著な差異が認められなかった。ただし、*obscurior* では第1回調査時に *Pidonia* の総個体数の15.2%で、高い優占度を示したが、第2回調査時では8.6%と減少していた。

また、雌雄別訪花個体数は第3表に示す通りで、雌雄の差は *matsushitai* 及び *sp.* が顕著で、前者は第1回調査時で雌は訪花個体数の5.5%、雄は94.5%、第2回調査時では雌5.3%に対して雄94.7%であった。*sp.* についても同様で、第1回調査時で雌18.6%、雄81.4%、第2回調査時では雌23.1%、雄76.9%である。*maculithorax*、*obscurior* 及び *mutata* においても上記の2種ほど顕著ではないが、第1回及び第2回調査時を通じて雌<雄であった。*insuturata*、*testacea*、及び *oyamae* においては、第1回調査時においては上記5種のように比較的顕著に雄の割合が多かったが、第2回調査時においては、雌雄の個体数の差が近くなっていた。また *debilis* においては、第1回及び第2回調査時を通じてあまり変らないが、常に雌雄の差が他の種ほど開くことはなかった。

以上が、今年行なった調査結果であるが、上記のデータには、天候、時間、温度等についてはまったく論ぜられない状態なので、今後はこの様な要因についてもさらに調査を続けたいと思う。

なお、末筆ながらこの発表を通じて終始懇篤な御指導を賜った東京農業大学昆虫学研究室の渡辺泰明助教授に心から御礼申し上げるとともに、*Pidonia* *sp.* に関する同定をしていただいた窪木幹夫氏、また本調査にたいへん有益な協力をいただいた、

倉田平四郎、小野寛昭、楠 嘉博、林 良一、倉田 剛、倉田 修 諸氏にも深く感謝する。

参考文献

- 大林一夫 (1941) 天牛類採集法。虫の世界, 4 (7/8): 10-15。
 — (1942) 日本産天牛類の習性と分布 I・II。昆虫世界, 46: 11-14, 46-49。
 林 匡夫 (1948) カミキリムシの話。宝塚昆虫館報, (44): 1-17。
 E. G. LINSLEY (1959) Ecology of Cerambycidae. Ethological and physiological adaptation of adults. Ann. Rev. Ent. 4, 112-120。
 — (1961) Adult Feeding. The Cerambycidae of North America, Part I, Univ. Calif. Pub. Ent., 18: 19-20。
 中村慎吾 (1967) 花粉を後食するカミキリムシ。広島虫の会会報, (6): 195-197。
 小島圭三・林匡夫 (1969) 原色日本昆虫生態図鑑 I (カミキリ編)。保育社・大阪。
 渡辺弘元 (1969) カミキリムシと花の開花期。げんせい, (20): 9-11。
 — (1976) サワフタギの花に飛来するカミキリムシと気象条件との関係。昆虫学評論, 29 (1/2): 55-60。 (東京農大)¹⁾ (沼田女子高校)²⁾

○アマミアオジョウカイの新産地

アマミアオジョウカイ *Themus kazuoi* は大林・佐藤両氏 (1968, 昆虫学評論, 20 (1/2): 33-34) により奄美大島の八津野を模式産地として記載されたが、その後の記録はない。しかしながら、筆者は東京農大昆虫学研究室に所蔵されている標本中に、下記の未記録地から採集された本種を見出したので記録しておく。

1♂, 徳之島井之川岳, 15. iv. 1962, 加藤 明 採集。

なお、模式産地である奄美大島産の個体と外部形態の比較検討を行なったが、特記すべきほどの差異は認められなかった。 (東京農大, 小野寛昭)

○対馬から新記録のハネカクシ (ハネカクシ科分布資料 6)

対馬のハネカクシ相に関しては、現在まで僅か20種が判明したに過ぎず、その知見はきわめて乏しい。

幸にも筆者の一人岸田は蛾類採集のため今夏対馬を訪れたが、その折灯火に飛来した若干のハネカクシ類を採集することが出来た。それらのハネカクシ類は全て同島からは未記録の種であったのでここに記録しておく。この結果35種のハネカクシが対馬から記録されたことになる。

1. *Carpelimus (Carpelimus) biimpressus* (CAMERON)

3頭, 佐須奈, 16. viii. 1976.

2. *Carpelimus (Carpelimus) vagus* (SHARP) ニセユミセミゾハネカクシ

1頭, 佐須奈, 16. viii. 1976; 1頭, 仁位, 17. viii. 1976.

3. *Oxytelus varipennis* KRAATZ

1頭, 佐須奈, 17. viii. 1971; 1頭, 仁位, 17. viii. 1976.

4. *Oxytelus incisus* MOTSCH.

1頭, 仁位, 17. viii. 1976.

5. *Bledius (Pucerus) curvicornis* SHARP

2頭, 仁位, 17. viii. 1976.

6. *Meton submaculatus* SHARP ヨコモントガリハネカクシ

1頭, 佐須奈, 16. viii. 1976.

7. *Lithocharis nigriceps* (KRAATZ) クロトガリハネカクシ

1頭, 佐須奈, 16. viii. 1976.

8. *Lathrobium unicolor* KRAATZ

1頭, 佐須奈, 16. viii. 1976; 1頭, 仁位, 17. viii. 1976.

9. *Leptacinus japonicus* CAMERON ウ斯巴ヒメナガハネカクシ

2頭, 佐須奈, 16. viii. 1976.

10. *Neobisnius pumilus* (SHARP) アカバヒメホソハネカクシ

2頭, 佐須奈, 16. viii. 1976.

11. *Neobisnius inornatus* SHARP

1頭, 佐須奈, 16. viii. 1976.

12. *Philonthus (Philonthus) rectangulus* SHARP カクコガシラハネカクシ

1頭, 佐須奈, 16. viii. 1976.

13. *Philonthus (Bisnius) aeneipennis* BOHEMAN ドウガネコガシラハネカクシ

2頭, 佐須奈, 16. viii. 1976.

14. *Cilea silphoides* (LINNÉ)

2頭, 仁位, 17. viii. 1976.

15. *Xenochara puberula* (Klug) ウスアカヒゲトハネカクシ

1頭, 佐須奈, 16. viii. 1976; 1頭, 仁位, 17. viii. 1976.

(東京農大, 渡辺泰明; 宝仙学園, 岸田泰則)

○コブヤハズカミキリ類の新分布地2題

黒沢良彦博士所蔵のコブヤハズカミキリ類の中に記録にとどめておくべきものがあったので、ここに報告させていただく。その前に、日頃から御指導いただき、また資料等に援助いただいている黒沢博士に御礼申しあげる。

1. ナンキコブヤハズカミキリ *Parechthistatus nankiensis* YOKOYAMA

1♂, 和歌山県東牟婁郡熊野川町小口, 12. viii. 1973, 吉田元重採集。ウラジロガシの倒木から採集されたという。

本種は従来、和歌山県大塔山のみから知られ、しかも南麓の古座川中流域だけがそのはっきりした採集場所であった。上記個体の採集場所は大塔山々頂から東方に約10km離れた所で、距離的には近いが別の山塊に属する。

原産地大塔山南麓の♂と比較して触角は短く体長の約2.6倍しかないが、上翅中央後方の隆起の強さや上翅端の突起に差は見られない。

2. コブヤハズカミキリ *Mesechthistatus binodosus binodosus* (WATERHOUSE)

1♂1♀, 長野県北安曇郡小谷温泉, 6. x. 1973 浜野栄次採集。

フォッサマグナ東縁の糸魚川—静岡構造線の東側にもマヤサンコブヤハズカミキリ *M. furciferus meriaionalis* HAYASHI が分布することは近年知られるようになった(小林靖彦, 1970, 松本むしの会年報 8, pp. 60—67)が、妙高山塊西側とくに小谷温泉～鎌池には多産し、一方コブヤハズカミキリは妙高山塊では奥裾花溪谷より西の採集例はこれまでなかったようである。

私も述べた(1975, 月刊むし55号, pp. 9—14)ように、マヤサンコブヤハズとコブヤハズはきわどい所で混棲しないようで、妙高山塊においては前種がより高標高地に、後種がそれより低標高地に分布するというすみ分け現象があるようである。今回採集されたコブヤハズが小谷温泉のどのあたりかは判らないが、小谷温泉より上部にかけてはきわめて優性にマヤサンコブヤハズが分布することから考えても、おそらくは温泉より低い場所で採集されたものと類推される。

なお上記個体♂は他産地のものより上翅後方の稜が弱い。(横浜市金沢区, 高桑正敏)

○ヒメヒラタチビタマムシの新分布地

ヒメヒラタチビタマムシ *Habroloma (Parahabroloma) atronitida* GEBHARDT, 1928 は従来四国、九州がその分布地として知られていたが、畑山武一郎氏の御好意によって本州産の本種を検視する機会を得たので、同氏の許可を得て発表する。

1頭, 奈良県伯耆子岳, 27. vi. 1976, 畑山武一郎採集。

叩き網で得たとの事である。本種は紀伊半島一帯に分布する事が予想されるので、今後の調査を期待したいものである。(横浜市磯子区, 秋山黄洋)

○トサヒラズゲンセイ和歌山に産す

トサヒラズゲンセイ *Horia tosana* KONO は、これまで徳島県、高知県、鹿児島県、屋久島、奄美大島、沖縄本島から記録されているが、本州からの記録はこれまでに全くなかった。

しかしながら、筆者の手元には、和歌山産の本種が1頭あるので、本州初記録として報告する。

1♀、和歌山県有田郡湯浅町島之内、27. vi. 1976、若狭昭久採集。

採集された場所は、湯浅町の町中で、しかも採集者の自宅付近のガレージに落ちているのを拾ったとの事である。

文末ではあるが、本文の発表において、分布等の御教示を頂いた、黒沢良彦博士に御礼申し上げる。(和歌山県有田郡、的場 續)

○ソナンヒメツヤケシコメツキの採集例

沖縄本島原産の *Melanoxanthus sonani* MIWA ソナンヒメツヤケシコメツキは、採集例の非常に少ない種である。筆者は不勉強で、沖縄本島の模式標本と岸井氏による西表島の1例しか知らない。筆者の手元には下記の標本があるので、新産地ではないが報告しておきたい。

1頭、沖縄本島与那覇岳、1. vi. 1974、入江平吉採集；6頭、西表島カンビラの滝附近、9—11. iv. 1973、入江平吉採集；1頭、西表島白浜、3. v. 1974、入江平吉採集。

沖縄本島ではヒメツバキ、カビンラの滝附近ではすべてツゲモチ、白浜ではアカメガンシワの花をすくって得た。沖縄本島産に比し、西表島産は前胸が黒ずみ、沖縄本島産が橙色(死後幾分黒ずむ)であるのに対し、西表島産は暗色である。

(福岡県宇美町、入江平吉)

○コメツキムシ分布2題

1. ミヅムネヒメサビキコリ *Sagojo yuppe* (KISHII) は岸井尚氏によって口永良部島で採集された1雌個体に基づいて1964年同氏自身によって記載された。本種は熊本諸島黒島から西表島にかけて分布が知られているが、下記地域からの採集記録はないので報告しておく。

1頭、石垣島オモト岳、16. v. 1975、深町宗通採集。2頭、石垣島オモト岳、20. viii. 1976、川田一之・五味玉樹採集；1頭、沖縄本島首里、12. vi. 1975、深町宗通採集。

なお、本種を記載した際、岸井氏は本種の前胸背板に一對の隆起物が、また胸部に前・中脚の跗節を収納する深い明瞭な溝をそれぞれ有する等の特徴によって *Sagojo* 亜属(原記載では *Sagcjo*)を設立した。しかし、大平仁夫博士は1967年に亜属を属に昇格させているので、ここではそれに従った。

2. ナガオミヅムネヒメサビキコリ *Sagojo lupinosus* (CANDÈZE) は、台湾、ボルネオ、北ベトナム、カンボジア、タイ、ビルマ及びインド等東南アジアに広く分布している種で我が国からは、奄美大島及び西表島から記録されている。しかし、筆者

の手許には下記の如く採集記録のない地域の標本があるので報告しておく。

3頭、沖縄本島奥、12. v. 1975、深町宗通採集。1頭、沖縄本島奥、10. v. 1975、深町宗通採集。

本種は、奄美大島の海岸から採集された個体に基づき1966年に大平仁夫博士によって記載されたが、同博士は後に、本種と非常に良く似た種が北ベトナムに分布していることを知り、両種を検討した結果、これらを同一種と認め1971年、先に記載した *nagaio* を *lupinosus* のシノニムと見做した。

なお、上記2種が含まれる *Sagojo* 属は、HAYEK (1973) が行った世界のサビキコリ亜科の再検討に於て、*Agrypnus* 属のシノニムとして取扱われている。しかしながらここでは属名は従来の扱いのままとした。

末筆ながら貴重な標本をご恵与下さった深町宗通、川田一之両氏にお礼申し上げます。

(東京農大、鈴木 互)

○青森県産タマムシ3種の記録

青森県下で採集したタマムシ科標本の同定を黒沢良彦博士に依頼したところ、次の種について記録するよう御教示を受けたので記録しておく。種名の同定を快諾された黒沢博士に深謝する。

1. アサギナガタマムシ *Agrius rotundicollis* E. SAUNDERS, 1873.

1♀、17. v. 1975、東津軽郡三厩。

ハウチワカエデの枯枝の樹皮下に潜んでいたものを採集した。幼虫の食痕も無数にあり、明らかにこれを食害していたものと思われる。他に2個体の本種と思われる死骸を発見したが、破損がひどく、種名の同定は不可能であった。

2. ダイミョウナガタマムシ *Agrius daimio* OBERBERGER, 1936.

1♂、22. vi. 1970、西津軽郡岩崎村十二湖。

黒沢氏の御教示によると、今までの最北の分布地は岩手県宮古市であると言う。もちろん青森県からは未記録で、これが最北の記録になるであろう。

3. シナノキチビタマムシ *Trachys auriflva* SOLSKY, 1876.

1頭、西津軽郡深浦町追良瀬。

五所川原農林高校生の工藤久美子さんの採集品で、青森県初記録である。黒沢氏の御教示によれば、本種の記録は山形、福島、新潟および福井県からだけで、裏日本に限られると云う。従ってこれも青森県初記録である。(五所川原農林高、阿部 東)

○カラカネチビナカボソタマムシ東北の記録

Nalanda ohbayashii Y. KUROSAWA カラカネチビナカボソタマムシは本州と九州から分布が知られている。しかし、黒沢良彦氏のご教示では、本州でも東北地方からは未記録であるという。幸い筆者は、東北とはいっても一番南であるが、福島県で本種を得ているので報告しておく。

11頭、福島県館岩村湯の花、3. vii. 1975、筆者採集。

甲虫ニュース

採集した個体は、衰弱し、枯枝の多い1本のオニグルミの葉上にいたもので、同時に *Agrius kurumi* Y. KUROSAWA クルミナガタマムシが多数得られた。

最後に、いろいろとご教示いただき、記録の発表を奨められた黒沢良彦氏に感謝する。

(福岡県宇美町, 入江平吉)

○クルミナガタマムシ北海道の記録

Agrius kurumi Y. KUROSAWA クルミナガタマムシは本州が分布地として知られているが、筆者は北海道でも得ているので報告しておく。

12頭、北海道生田原町豊原, 28. vii. 1976, 筆者採集。

採集した個体はオニグルミの葉上にいたもので、少なくなかった。

最後に、ご教示いただいた黒沢良彦氏に感謝する。

(福岡県宇美町, 入江平吉)

—＜紹介＞—

立山の昆虫相

富山県昆虫同好会：中部山岳国立公園立山黒部地区学術報告, pp. 223~369, 付6図版, 1976年3月。

立山は日本三名山の一つとして今日まで多くの人達に親しまれてきた、と同時に古くから宗教の山として信仰の対象となっていた。したがって、この地域の自然環境は長い間正に自然の状態で保存され、ミヤマモンキチョウをはじめとする高山蝶やカオジロトンボ等高層湿原に生息するトンボ類の乱舞は多くの昆虫愛好者達の目を楽しませてくれた。しかし、近年になってからの観光開発は、立山の自然環境を著しく変貌させつつある。この様な折に、自然保護協会の委嘱を受けた富山県昆虫同好会は1973~1974年の2ヶ年間に亘って立山の昆虫相調査の実施に当った。表記の文献はその調査結果の報告書である。

報告書の約3/4は立山産昆虫目録に費され、現在までの記録種1,166種に、新記録種543種が追加され合計1,709種の昆虫類が集録されている。採集された昆虫類は普通種を除き全て専門家の手を煩せて同定の正確が期されているが、それと同時に従来記録で疑念のある種についてはそれぞれに注が付き添って、参照者に対する配慮がなされている。

甲虫類は全部で46科481種が記録されているが、それらの中から種類数の多い科を列記すればカミキリムシ科73種、コメツキムシ科61種、ハムシ科50種、

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!

1, 2, 3, 4, 5号(各号 100本 160円)

なお、無頭針00号もできました。その他、採集・標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

オサムシ科(広義)50種、ゾウムシ科42種及びコガネムシ科27種である。コメツキムシ科が全甲虫類の約13%を占めてカミキリムシ科に次いで多くの種類が記録されているのに反してタマムシ科(2種)、ケンクスイ科(5種)、オオキノコムシ科(7種)、ゴミムシダマシ科(10種)、ナガクチキムシ科(2種)、ハナノミ科(2種)等の種類数が予想外に少ない点は地域性の特色を示しているのか、採集方法による単なる技術的な反映なのか今後検討の要がある。

この他、本報告書には fauna の解明ばかりでなく主要生息種の生息実態に関する調査結果も報告されているが、甲虫類関係ではかつて室堂から雷鳥沢に至る石場に豊富に見られたミヤマハンミョウが近年になって減少の傾向を強め、現在では生息地域が極めて限定されつつあるという指摘は注目される。

なお、本書には立山の昆虫相に関する参考文献として152篇が列挙されているが、これは今後同地域の昆虫相に関心を持つ者にとって大変便利なものとなろう。この様な文献蒐集は日頃からの地道な努力の集積の結果で、その労苦には心から敬意を表すると同時に、この時点で調査活動を終息させることなく、今後の継続事業として一層の精査をまわって、立山昆虫相の全貌が解明されることを期待したい。

(東京農大, 渡辺泰明)

—＜連絡・報告(2)＞—

◇昭和52年度より会費値上げ

本会は誰もが気楽に入会出来る様、¥1,000の年会費で運営されて参りましたが、御承知の通り昨今の諸物価上昇に加えて来春には通信費の値上げも予定されております。したがって、このままの情勢では会の発展はおろか、従来通りの活動すら困難と思われれます。そこでまことに不本意ではありますが、来年度(昭和52年)からの会費を年間¥1,500に値上げすることを、過日の世話人会で申し合せました。会員の皆様も諸情勢御賢察の上、御了承下さいませ様御願ひ申し上げます。(世話人一同)

甲虫談話会

会費(1カ年)1000円、次号は3月中旬発行予定

投稿〆切は2月10日。

発行人 黒沢良彦

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話(364)2311, 振替 東京 60664

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥4,500, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,400, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,200, 4個以上 ¥850 (以下同様), 第二地帯 ¥1,400, ¥950, 第三地帯 ¥1,600, ¥1,050. 其他, 各種器具, 針などを製作販売します。カタログを御請求下さい。(¥140)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話 (03) 811-4547